

W.G. アストン『日本文語文典』初版 訳注稿 (3)

遠藤 佳那子

1、凡例 (補足)

- ・原文において斜体のローマ字で記された日本語は、適宜、漢字仮名交じり表記に直し「 」に入れて示すが、斜体のローマ字で記された英語その他の例示については、翻字せず「 」を付さずにおく。

例) 原文 : so that it sounds not unlike *wh* in *who*.

→訳 : そのためこの音は *who* の *wh* に似ていないこともない。

(第一章「発音」より)

2、本文訳注稿

[29]

第4章 (Chapter IV.)

活用する主要な語

(INFLECTED PRINCIPAL WORDS.)

(「^{ことば}詞」または「はたらき-ことば」)

この種類はヨーロッパ言語の文法における 'verb' や 'adjective' に相当する。ただしこの説明には欠点があることを考慮しなければならない。その欠点については後述する考察から理解されるだろう。読者諸君は、ヨーロッパ言語の学習によって獲得してきたであろう活用 (inflection) の機能に関するいかなる観念も、意識からいったん捨てるのが良い。日本語において活用は、態 (voice)、法 (mood)、時制 (tense)、人称 (person)、性 (gender)、数 (number)、格 (case) のいずれとも関係が無い。日本語の動詞には、受動態 (passive voice) のかわりに能動動詞 (active verbs) に似た活用を持つ派生動詞 (derivative

verbs) がある¹。法と時制は、「てにをは」すなわち接尾辞 (suffixes²) によって示される。人称は、尊敬や謙譲の助辞 (particle) を用いることで、時折、間接的にほめかされるだけである。性は英語の 'he-ass (雄ロバ)' や 'she-ass (雌ロバ)' などに類似した複合語によって示される。数と格は、たとえ述べられるとしても接尾辞や助辞によって表現され、名詞から明確に切り離される。名詞はすでに述べたように決して活用しない。

日本語において、接尾辞の付加とは区別される活用の主要な役割とは、用いられた活用に従って同一の語根 (root) へ異なる品詞の能力を与えることである。ラテン語、あるいは英語においても、活用は限られた範囲内ではあるが、同じ機能を有する。したがって、動詞語根 *fac* から、動詞 *facit*、実質上の名詞である *facere*、そして形容詞 *factus* を得る。英語においては、同一の語根 *lend* が、動詞として *lends* に現れ、形容詞や、あるいは条件によっては名詞として分詞 *lending* に現れる。この体系を実現できる範囲が、日本語文法に特有の主要な特徴のひとつである。全ての動詞と形容詞の語根が、名詞、副詞、形容詞、動詞として連続的に現れる形式を持つだけでなく、時制、その他を示す接尾辞も、同じように活用をもち、その活用から影響を受ける。

活用は第二の機能を持ち、それは接尾辞すなわち「てにをは」を加える語基 (bases) を与えることである。本書において 'Negative Base (否定語基)' という用語が採用されている形式は、この目的にのみ用い

¹ 動詞に受身の助動詞「る らる」を添加したものを想定している。本章「派生動詞」の節、「3. 受動動詞」([41] ページ) に詳しい。

² 本章でアストンは和語「てにをは」に相当する用語として接尾辞 (suffix) を用いる。「てにをは」は、本書第2章に「この名称に含まれるものは、冠詞 (article)、前置詞 (preposition)、それから動詞・形容詞の語尾 (terminations) である。」(遠藤 2022) と解説されており、本章での接尾辞 (suffix) も同様の内容を含む。

られ³、そして他の四つの各形式も、ある時には切り離され独立した語であっても、ある種の接尾辞を接続させるための、たんなる語基に過ぎないこともある。

次の表は、日本語の語が可能とする全ての活用を概観したものである。第7章の末尾に示した語尾の表とあわせて学習されたい。

[31]

動詞の主要部 (PRINCIPAL PARTS OF THE VERB.)

《語根、あるいは副詞 Root or Adverb.》⁴

動詞語根「貸^かし」「食^たべ」などは、名詞や形容詞と複合したのに見られる形式である。これと対応する位置にあるのは、形容詞語根の短い形式、すなわち「良^よく」「悪^あしく」ではなく、「よ」「あし」である⁵。「よ」「あし」の形式は、「白^{しろ}の薩^{さつ}摩^ま上^{じやう}布^ふ」‘white Satsuma fine cloth.’と似た句のように、時折名詞としても現れる。

第1. 語根は名詞になりうる。例：「よろこび」‘joy’は「よろこぶ」‘to rejoice’の語根、「まわり」‘circumference’は「まわる」‘to go round’の語根。「言^いいも終^おわらず」‘without even finishing his say’のような句においては、「言^いい」は「言^いう」‘to say’の語根であり名詞である。「く」の形式をとる形容詞語根⁶も時に名詞になるが、それに対応する形式の動詞語根よりもまれなことである。例：「なを逃^{のが}れ難^{がた}くわ」

³ 「否定語基」とは、いわゆる未然形に相当する。未然形は助詞・助動詞を伴わずに文の成分となることができないことを言及している。

⁴ 本章における「root (語根)」は、多くの場合、学校文法の連用形を指す。しかしアストンは、この形式に副詞的な用法や実名詞としての用法もあり、「連用」はその用法の一端を表す用語に過ぎないことに言及しているため、「連用形」とは訳出せずにおく。

⁵ アストンの参考文献のひとつ、義門『山口栗』(天保七年(1836)刊)下巻に、形容詞語幹と名詞の複合を示す表があり、参照した可能性がある。

⁶ 形容詞の連用形のことを指す。

活用の一覧表

	動詞の語根							形容詞の語根	
	正格			変格				第1活用 よ 'good'	第2活用 あし 'bad'
	第1活用 かし 'lend'	第2活用 たべ 'eat' でき 'can'	第3活用 み 'see'	あり 'be'	き 'come'	し 'do'	いに 'go away'		
語根または副詞	かし	たべ でき	み	あり	き	し	いに	よく	あしく
終止形または動詞	かす	たぶ でく	みる	あり	く	す	いぬ	よし	あし
連体形または 実名詞形式	かす	たぶる でくる	みる	ある	くる	する	いぬる	よき	あしき
否定と未来の ための語基形式	かさ	たべ でき	み	あら	こ	せ	いな	よく	あしく
完了	かせ	たぶれ でくれ	みれ	あれ	くれ	すれ	いぬ いぬれ	よけれ	あしけれ

'a thing which it is still more difficult to escape from. (逃げることがな
お一層難しいもの)'. これらの形式の名詞としての能力については、他
の名詞と同じようにして、格などを示す接尾辞を付加されることがある。

第2. この形式は、副詞になりうる。例：「^{ちか}近く^{はし}走り^き来たり」 'he has
come near running. (彼が走りながら近くに來た)'. ここで「^{ちか}近く」と
「^{はし}走り」はどちらも「^き来たり」に対してまさしく同じ関係にある。二つ
の語はどちらも彼の來る様子を描写している。これは他の動詞語根、ま
たは形容詞語根と複合する場合の、最も一般的な動詞語根の機能であ
る。これは副詞としての語根の用法であり、『^{ことばのちかみち}詞捷徑』においてはこれ
に対して〈^{ぞくようげん}続用言〉すなわち 'word joined to inflected words. (活用す
る語に接続する語)' という用語を提案している。

第3. 語根の最も重要な機能は、他の国学者によって創案された用語
に描写されている。すなわち、〈^{れんようげん}連用言〉つまり 'word coordinated
with inflected words. (活用した語と等位の語)' である。日本語の統語
上の規則として、二つ、もしくはそれ以上の動詞や形容詞が同一の文中
で等位になる場合、最後のものだけが活用するか接尾辞を受ける。その
活用や接尾辞は、語根形式で先行して置かれている全てのものに正しく
かかっている。

例

^{ちさ} 地裂け、 ^{やま} 山おちいり、 ^{かわ} 川さかしまに ^{なが} 流る。	The earth gapes, mountain collapse, and rivers flow backwards.
---	---

ここで、「裂け」と「おちいり」は終止形 (conclusive form) の「裂
く」「おちいる」の代わりに置かれ、一連の動詞の最後、「^{なが}流る」だけが
終止形の活用形式を保持しているのだ。

[32]

^{どろがわ} 泥川に ^{しょう} 生ずるわ、 ^{にくあか} 肉赤く ^{あぶらおほ} 油多し。	As to those which are produced in muddy streams, their flesh in red, and their oil plentiful.
---	---

すながわ しょう
砂川に生ずる
にくしろ あぶら
わ、肉白く、油
すく
少ない

As to those which are produced in
sandy streams, their flesh is white,
and their oil scanty.

上記の例「赤く」「白く」は、終止形「赤し」「白し」の代わりに置かれ、終止形はこれらの文を終える形容詞「多し」に現れている。

「険しく高き所。」‘A steep and high place.’ この句において、「険しく」と「高き」はともに「所」の修飾語である。しかし上述した規則によって、最後の「高き」だけが適切な活用形式、つまり連体形 (attributive form) を取るのである。

複合動詞のいくつかの要素は、しばしばこのように等位となる。

第4. 数々の接尾辞、すなわち「てにをは」は、語基としての語根に接続する。その接尾辞の一覧表は、活用するものの語形変化 (conjugation) とともに第6章と第7章に示した。

形容詞語根に関しては、形容詞語根に直接接続する接尾辞がほとんど無いことに後ほど触れる。一般的に動詞「有る」‘to be’が挿入される。

《終止形 Conclusive Form.》

この形式は、国学者によって、「^き截るることば」、^{ぜっていげん}〈^{さいだんげん}絶断言〉⁷など、様々に名付けられている。これらは文字通り‘cutting (截る)」、‘determining (定める)」、または‘decisive word (決定的な言葉)’という意味である。これらの修飾語は、我々の直説法 (indicative mood) の形式と同じく、終止形の機能だけを言うのではなく、常に文

⁷ 原文の漢字表記そのままに記しておく。管見の限り、国学者の文献に「^{ぜっていげん}絶断言」「^{さいだんげん}絶断言」の用語は見受けられない。原文にはローマ字表記で「*zet-tei-ge-n*」「*sai-dan-ge-n*」とあり、ルビに反映させた。正しい漢字表記は「^{ぜっていげん}絶断言」「^{さいだんげん}絶断言」であろう。アストン『日本文語文典』第二版(1877)では、「^{ぜっていげん}絶断言」「^{さいだんげん}絶断言」に修正されており、誤植だと考えられる。「^{ぜっていげん}絶断言」は鈴木重胤『詞捷徑』の用語、「^{さいだんげん}絶断言」は義門が『友鏡』(文政六年〈1823〉刊)から一貫して用いている用語である。

末に位置することとも関連している。厳密に言えば、終止形はいかなる時制でもない。例文「川かわ流ながる」「川かわ深ふかし」において‘flowing’ ‘depth’などの特性は、時間に言及せずに、川の属性であると断定される。そしてそれが過去、現在、または未来のどの時間を意図しているのか判断できるのは、唯一、文脈からだけである。しかしながら過去と未来が一般的に接尾辞によって示される一方で、現在時制は通例、動詞語根や形容詞語根の終止形に翻訳するのが最も適切である。従って、文脈に反する表示が無い限り、上記の句は‘the river flows’、‘the river is deep’と翻訳されることになるだろう。もっとも、文脈が求めるのであれば、‘the river flowed’や‘the river will flow’、‘the river was deep’や‘the river will be deep’などと翻訳することも極めてありうることはある。

[33]

日本語の書物には適切な句読法が欠如しているため、初心者にとって、ひとつの文がどこで終わり、次の文がどこから始まるのか判別するのがしばしば難しくさせている。これに対するただひとつの対策は、動詞や形容詞のもともとの語根の終止形と、活用した「てにをは」つまり接尾辞の終止形との両者に慣れることにある。

終止形の例

のち ひと さだ ま
後の人の定めを待つ。

虎 にんげん た
わ人間を食ふ。

この「てにをは」にふた心あり。

この「はたらき - ことば」いと おほ多し。

おむ
概ね「や」に同じ。

I await the decision of posterity.

The tiger eats men.

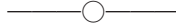
This suffix has two meanings.

These inflected words are very numerous.

Its general meaning is the same as that of ya.

いくつかの副詞は動詞語根の終止形を重複させることによって得られる。例：「おそる - おそる」‘tremblingly’、「ゆく - ゆく」‘as time goes on’ ‘while on our way’。

この形式に対する接尾辞に関しては、第6章と第7章を参照のこと。



注——終止形は、当代の話し言葉の形式からはほとんどまったく消失してしまった。動詞の場合、その地位は連体形によって浸食されてしまっている⁸。助動詞 (auxiliary) 「ます」は、ひょっとすると、終止形を維持しているただひとつの例かもしれない。これでさえ、連体形「まする」と混同されている。形容詞語根の「き」「し」という形式は、話し言葉においては「k」や「sh」の文字が失われ、その結果、もはや両者の区別は存在しない。例えば、「白^{しろ}き」と「白^{しろ}し」は一様に「白^{しろ}い」になってしまった。例外は「無^なし」で、否定の形容詞の、縮約されていない終止形であり、話し言葉ではそれほどまれではない。縮約形の「無^ない」は連体形の「無^ない」と区別ができないが、より一般的である。いくつかの地方の方言では、古い形容詞の終止形がまだ使われている。

連体形または実名詞の形式

(THE ATTRIBUTIVE OR SUBSTANTIVE FORM.)

この形式は、『詞捷徑』で〈^{ことばのちかみち}続体言〉すなわち ‘word joined to nouns (名詞に接続する言葉)’ と称されている。すなわち形容詞である。そしてその他にも、似通った意味の名称が他の国学者によって創案されている⁹。

[34]

⁸ 連体形終止が一般化し、終止形と連体形が合流したという日本語の歴史的変遷について述べている。

⁹ 他に、義門の「連体言」、富樫広蔭の「続言段」がある。

1. この形式は、形容詞でありうる。動詞語根の場合、ing の形式を取る英語動詞の分詞 (participle) に相当する。だが、これはしばしば動詞を関係詞節内に置くことによって翻訳される。終止形と同様に時制を持たず、翻訳の際には、現在か過去か未来か、どの時制を用いるべきかを文脈が決定する。

いくつかの能動他動詞の連体形は、通常、派生動詞、受動動詞、自動詞がより適切だと思われる箇所 で用いられる。例：「知らぬ^{くに}国」 'an unknown country'、 「わからぬ^{こと}事」 'unintelligible things' 'nonsense'、 「伝吉と申す^{もの}者」 'a man called Denkichi'。

連体形の形容詞用法の例

<p>のきちか と ほたる 軒近く 飛ぶ 螢。 お すす ととき 追わんと 進む 時。 い じゆいちにち 往ぬる 十一日。 ゆくえ な 行方 無く。 ためとも ゆくえし 為朝の 行方 知れ ざる こと。 よ ひと 良き 人。 うをおお かわ 魚多き 川。</p>	<p>The firefly that flies near the eaves. When he started in pursuit. The past 11th. (day of the month). Without any place to go to. His not being able to learn where <i>Tametomo</i> had gone to. A good man. A river in which fish are plentiful.</p>
---	--

2. この形式は、名詞として、二つの意味を持つ。例えば「貸^かす」は、 'the person or thing who lends (貸す人、またはもの)' もしくは 'the act of lending (貸す行為)'、 「良^よき」は 'good persons or things (良い人、またはもの)' または 'goodness (良さ)' という意味となる。言い換えれば、「貸^かす」は「貸^かすもの」と「貸^かすこと」、どちらも等しい。「良^よき」は、「良^よきもの」と「良^よきこと」、どちらも意味が一致する。どちらの意味においても連体形は、名詞としても用いられうる語根¹⁰ とは同じ意味を持たないことは、後に触れる。

¹⁰ 連用形の実名詞用法のこと。

名詞としての連体形の例

ぞくたいげん 続体言より受くるわ。 たつと いや 尊きも卑しきも。 ほどこ しまつ 施すにも、始末にも。 かみいちまい す 紙一枚にても捨	Those (teniwoha) which are attached to the attributive form. Both noble and mean persons. Both in liberality and in economy. Fearing the throwing away of
--	---

[35]

つるをおそれて。 この字を用うるは あやま 誤りなり。 ひ ひかり 日の光にそのヒレ をひらめかするわ旗 を振るがごとし。 わずらわしきまで おお 多し。	even a single sheet of paper. The use of this character is an error. Its causing its fins to glisten in the sunlight is like the waving of a flag. They are numerous in so far that they are troublesome. i.e. They are so numerous as to troublesome.
---	---

3. この形式は、「ぞ」「や」そして疑問詞 (interrogative) を前に置いたとき、終止形に取って代わる¹¹。この法則は第9章においてさらに充分に説明している。

例

おとなしがわ 音無川とぞついに なが い 流れ出づる。 これぞめでたき。	It is into the river Otibashi that it at last becomes as it flows out. It is this that is beautiful.
--	--

4. 国学者は、語基としてのこの形式に接続する接尾辞の表を掲げる。しかしこれらのほとんどは、名詞としての機能において、それに接続す

¹¹ 係結びの法則のこと。

る格の接尾辞だけである¹²。

《否定と未来の接尾辞のための語基 Base for Negative and Future Suffixes.》¹³

この語基は、それ自体で完全な語を構成することはない¹⁴。これは否定と未来の接尾辞と関連して現れるのみである。この形式は『詞捷徑』で〈しょうぜんげん将然言〉すなわち‘future form (未来形)’と称され、同書において完了を指す〈きぜんげん既然言〉すなわち‘past form (過去形)’に対比される。『さんいんこう三音考』によれば、この形式は「いましか未だ然らざるにもち用う」‘is used for events which have not yet taken place (まだ生じていない事象に対して使う)’とある¹⁵。この記述は、この形式が未来だけでなく否定に対しても適用されうることから、『ことばのちかみち詞捷徑』の「しょうぜんげん将然言」よりも適切であると思われる。

この語基に接続する接尾辞は、第6章と第7章を参照のこと。

完了 (PERFECT.)¹⁶

通常書き言葉において、第一活用の動詞は、語根に「ある」を加え

¹² 例えば、アストンが頻繁に参照する鈴木重胤『詞捷徑』には、連体形に相当する「つづ体言」について、後続する助詞・助動詞の一覧表を示しており、断定の助動詞「なり」と、助詞「か」「かな」「かも」「まで」「に」「を」「より」「が」「がね」「がに」「ばかり」「だに」「さへ」「すら」「ごと」「から」「まま」「ながら」「ならし」「のみ」「も」「は」「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」を列挙する。アストンが指摘するように、格助詞が含まれている。

¹³ 未然形に相当する。

¹⁴ 本居春庭『詞八衢』(文化五年〈1808〉刊)は、未然形専用の形式を持つ四段活用について「そのままにては未_レ語をなさず」と言及している。

¹⁵ 本居宣長『漢字三音考』(天明五年〈1785〉刊)。「第一、音 [アカサタナハマヤラワ] ハ未_レ然ラザルニ用ヒ。」(三丁表)

¹⁶ 已然形に相当する。

ることによって完了の形式となる。語根の末音「i」が「有る」の先頭の「a」に連なると母音結合を形成し、「e」となる。動詞の終止形のように、この完了は時制ではない。これは行為の完結をただ示すだけで、現在、過去、未来のいつ完結したか、という時間の手がかりを何も与えないのである。

[36]

いま考察している形式は、国学者によって、普通の書き言葉の完了「えり」¹⁷と同一であると考えられている。この故に、『詞捷徑』ではこの形式に「既然言」なる用語が当てられており、否定と未来の形式の語基について説く際、上述のように説明されている。末尾の「り」は他の多くの例では、脱落してしまった。^{*}

^{*} 'to be' を意味する動詞「有る」の末尾「り」「る」の脱落は、「見えざなり」が「見えざなり」になるような書き言葉の形式において例証されている。話し言葉において、「たり」に対して「る」が脱落して過去時制の「た」になり、「きれいな」のような語の「な」、長崎方言で（「悪くある」に対して）「悪か」、そして江戸方言で（「有りたりけり」に対して）「有ったけ」になるなどである。

日本語に関する古代の遺跡は、この形式がそれ自体で完了となる事例を提供している。だが通常の書き言葉では、これを次の二つの場合でのみ用いる。

1. 「こそ」を前に置く場合。この形式は文末で終止形の代わりに、かつ終止形と等価に用いられる（第9章を参照のこと）。故に、国学者によって「こそむすの結びことば」すなわち 'form conjoined with koso（「こそ」と結ばれる形式）」と称されてきた。

¹⁷ 動詞語尾に完了の助動詞「り」が接続したもののこと。

例¹⁸

これこそ ^{たま} 玉なれ。	It is this, and this only, that is the jewel.
^{よね} 米こそ ^よ 良けれ。	It is rice only that is good.

2. この形式は、より一般的には、仮定と譲歩の助辞「ば」「ど」「ども」に接続する語基である。ここではこの形式は、それ本来の完了としての機能を持つ。後述するように¹⁹、「ゆけば」‘since he has gone (彼が行ってしまったので)’または‘if he has gone (彼が行ったので)’のような形式と、「ゆかば」‘if he go (彼がもし行ったなら)’もしくは‘if he should go (彼が行くなら)’との比較から見て取ることができる。

動詞の第一活用と、不規則動詞「有^ある」において、この形式は命令法(imperative mood)の形式と一致する。例:「行^ゆけ!」‘go!’、「なかれ! (「なくあれ」のこと)」‘let it not be!’。

他の活用において命令形(imparative)が形作られる方式については、接尾辞「よ」「ぞ」を参照すること²⁰。

活用 (CONJUGATIONS.)

動詞語根の活用は三種あり、形容詞語根の活用は二種ある。

¹⁸ 富士谷成章『脚結抄』安永七年(1778)刊、卷二「曾家」三丁表の例文を典拠とする。

¹⁹ 第6章「動詞と形容詞に接続する活用しないでにをは」において言及される。

²⁰ 動詞の第一活用とは四段活用にあたる。四段活用とラ行変格活用は、命令形と已然形が同一形式だが、一段活用・二段活用では語尾「よ」を伴う。そのため「よ」の節で言及するということである。

《動詞の第一活用 First Conjugation of Verbs.》²¹

この活用には、非派生動詞の大多数が属する。これは語根とは異なる否定語基の形式を持つこと²²、そして各活用形が語根の音節数の増加に関わらないという事情²³によって、区別される。

[37]

《動詞の第二活用 Second Conjugation of Verbs.》²⁴

この活用に属する非派生動詞の数は少ない。だが全ての受身動詞と、ほとんどの使役動詞を含む。国学者はこの活用を、語根が「i」で終わる動詞と「e」で終わる動詞との間の無用な線引きをすることで、二種の活用とする²⁵。

第二活用において、語根と否定語基は、形式上同一である。そして連体形と完了は、語根より一音節多い。話し言葉において、この活用の「i」の動詞の連体形と完了は「iru」、「ire」で終わり、同じく「e」の動詞は「iru」、「ire」で終わる。

これらの形式は、書き言葉と全く無関係というわけではなく、「uru」、

²¹ 四段活用に相当する。

²² 一段活用・二段活用は、未然形が連用形の形式と一致するが、四段活用は未然形と連用形の形式が異なる。

²³ 接辞「る」「れ」「よ」が付加されない、という点で他の活用型と区別されている。同様に、富士谷成章は接辞（富士谷成章は「靡」と称する）が無いという観点から四段活用を「有末無靡」と分類する。

²⁴ 上二段活用と下二段活用に相当する。

²⁵ 本居春庭『詞八衢』がイ・ウ列音で活用するものを「中二段の活」（学校文法でいう上二段活用）、ウ・エ列音で活用するものを「下二段の活」と分類して以来、多くの国学者によって踏襲されてきた分類。ただし、富士谷成章は接辞（「靡」）が有るということで両者を「有靡」と一括しており、アストンの分類は富士谷成章に類似する。

「ure」という古典的な形式よりも実際に古いと信じる理由がある²⁶。「keru 蹴^ける」‘to kick’という動詞が「kuru」という形式だとみなすことは決してない²⁷。

《動詞の第三活用 Third Conjugation of Verbs.》²⁸

第三の活用は、語根と同形式の否定語基を備える点で第一活用とは異なり、連体形と見分けのつかない終止形を備える点で、第二活用とは異なる。次のリストは、この活用を持つ全ての動詞である。例外無く、単音節の語根を持つことが見てとれる。

着 ^き る	to clothe.
似 ^に る	to resemble.
煮 ^に る	to boil.
干 ^ひ る	to dry in the sun.
簸 ^ひ る	to winnow.
見 ^み る	to see.
射 ^い る (イル)	to shoot with a bow.
鑄 ^い る (イル)	to melt.
居 ^い る (キル)	to dwell.

²⁶ この記述については、どんな事例を想定して記述しているのか、よくわからない。

²⁷ 当時の国学者、例えば本居宣長、本居春庭、義門は「蹴る」の古形として「くうる」（ワ行下二段活用）を想定する。

²⁸ 上一段活用に当たる。本居春庭の「一段の活」に相当し、富士谷成章の「無末有靡」に含まれる。

不規則動詞 (IRREGULAR VERBS.)

《「^あ有る」 'to be' 》²⁹

「^あ有る」の活用は、終止形においてのみ第一活用の動詞と異なり、「^あ有る」の代わりに「^あ有り」となる。しかしながら、「^あ有る」の形式は終止形の接尾辞に対する語基として保持されている³⁰。

[38]

「おる」 'to dwell' や、「^あ有る」と複合した接尾辞も、「^あ有る」と同様に活用する。例えば「ける」「たる」「ざる」「める」「なる」「せる」などがある。「^あ有る」の命令形は「^あ有れ」である。

《「^く来る」 'to come' 》

接尾辞「し」と「しか」は他の動詞では語根形式に付加するのが規則であるが、この動詞においては、必ずというわけではないが、一般的によく否定語基「こ」に接続する³¹。「^く来る」の命令形は「こ」である。

《「^くする」 'to do' 》

接尾辞「し」「しか」は、この動詞の語根形式「し」に接続することは決してなく、常に否定語基「せ」に接続する³²。「^くする」の命令形は「せよ」である。

《「^い往ぬる」 'to go away' 》

「^し死ぬる」 'to die' や接尾辞「ぬる」も「^い往ぬる」と同様に活用する。そして接尾辞「ぬる」は「^い往ぬる」の先頭の「i」を省略したものに過

²⁹ 本居春庭の系譜に連なる国学者は「あり」を変格活用としない。また、鈴木胤の「^{ありかた}形状の詞」のように、動詞ではなく形容詞と同類とする立場もある。

³⁰ 終止形接続の助動詞（「べし」「らむ」など）がラ行変格活用型では連体形「^あ有る」に接続するということ。

³¹ 過去の助動詞「き」の連体形「し」と已然形「しか」が、カ行変格活用「^く来」に対しては未然形「こ」に後接することを述べている。

³² 注 28 同様、過去の助動詞「き」の連体形「し」と已然形「しか」が、サ行変格活用「す」に対しては未然形「せ」に後接することを述べている。

ぎない。「往ぬる」は命令形では「往ね」である。

形容詞の活用 (CONJUGATIONS OF ADJECTIVES.)

たいていの形容詞は、第一活用³³に属する。第二活用³⁴は「し」または「じ」で終わる語根³⁵の形容詞のみを含む。国学者は、完了の語尾「けれ」は連体形の語尾「き」と「有る」‘to be’の完了「有れ」との合成だという見解を持っている³⁶。より可能性が高いのは、「く」+「けれ」を縮約したもので、「く」は副詞形式の語尾で、「けれ」は接尾辞「ける」の完了である³⁷。

次のような形式の存在がこの見解を裏付けている。「よけん」、この「けん」は明らかに「ける」の未来であり、「き」+「有らん」を意味することはありえない³⁸。それから「なかれ」のような命令形（これは事実「なく」+「有れ」である）と、それに対する「なけれ」のような完了の存在である³⁹。

³³ ク活用にあたる。

³⁴ シク活用にあたる。

³⁵ ここでの形容詞の「語根」とは、連用形ではなく、学校文法でいう形容詞語幹に相当する。

³⁶ 形容詞の已然形語尾「けれ」は、連用形語尾「き」に「あり」が融合したものとする説。

³⁷ 国学者の説に対してアストンが提唱するのは、連体形語尾「く」と過去の助動詞「けり」の已然形が縮約したという説。

³⁸ 「よけん」の「けん」を過去推量「けむ」だと分析している。なお、アストンはこれを過去の助動詞「けり」の未来形としているが、第7章の「けり」の項で言及することも、「けん（けむ）」を別に立項することもない。また、完了「ぬ」に「む」が後接した「なん（なむ）」を「「ぬる」の未来形」と述べている（第7章 p.62）。なお現代では、「よけん」は「良し」の古い未然形「よけ」に推量「む」が接続したものと分析される。

³⁹ 「あり」が介在して成立したカリ活用の「なかれ」が存在するため、それとは異なる形式の已然形「なけれ」は「あり」の融合ではないという論理。

派生動詞 (DERIVATIVE VERBS.)

I. 名詞から派生したもの (Derived from Nouns.)

動詞は名詞に「する」 'to do' を加えることによって形作られる。この主要部には、おびただしい数の漢語由来の語が充当される。この位置では「する」の先頭「s」が通常「にごり」を帯びる。例：「生^{しやう}」 'birth' から派生した「生^{しやう}ずる」 'to be born'、^{おう}「応」 'fitness' から派生した「ずる」 'to suit'。

II. 動詞から派生したもの (Derived from Verbs.)

1. 自動詞と他動詞 (Intransitive and Transitive Verbs)。

英語では、同一の動詞語根を自動詞として、あるいは他動詞として使用するための異なる語や形式というものは、めったに無い。従って、ride、sink、break、bend その他多くの語は、環境に応じて自動詞でもあり、他動詞でもある。

[39]

だがこのような場合、日本語では一般的に、同一の語根を含む二つの異なる動詞を有する。

これらの動詞はいくつかの異なる方法で形づくられる。ある時は自動詞の形式から他動詞を、ある時はその逆、またある時は、共通の語根を含んだ、もう廃れてしまった動詞から作られる。

自動詞は受動動詞と区別されねばならない。例えば「切^きる」 'to cut' の自動詞形式「切^きるる」は、受動形式である「切^きらるる」と混同してはならない。後者は厳密に 'to be cut (切られる)' とのみ訳される。「切^きるる」は 'to possess the quality cut (切れたという特性を備えていること)'、すなわち 'to be discontinuous (繋がっていないこと)' を意味する。これは受動性の観念、あるいは他者からであれ主語自身によってであれ、従わせられたという観念を何も伝えていない。これらの多くは、

—able や—ible で終わる形容詞の助けを借りて翻訳するのが最も良い。「売^うるる」「切^きるる」などはまさしくフランス語の se vendre、se couper などによって訳される。

次に挙げる例は、他動詞と自動詞は互いの語から作られるという様々な方式を例証している。

自動詞	他動詞
第一活用	第二活用
しりぞ 退く 'to retreat.'	しりぞ 退くる 'to drive back.'
た 立つ 'to stand.'	た 立つる 'to set up.'
すす 進む 'to advance.'	すす 進むる 'to advance.'
や 止む 'to cease'	や 止むる 'to cease.'
第一活用	第一活用
うご 動く 'to move.'	うご 動かす 'to move.'
おどろ 驚く 'to be astonished.'	おどろ 驚かす 'to astonish.'
かわ 乾く 'to dry.'	かわ 乾かす 'to dry.'
およ 及ぶ 'to extend.'	およ 及ぼす 'to extend.'
第一活用	第二活用
よ 寄る 'to approach.'	よ 寄する 'to bring near.'
の 乗る 'to mount.'	の 乗する 'to mount.'
第三活用	
に 似る 'to be like.'	に 似する 'to make like.'
第二活用	第一活用
き 聞こゆる 'to be audible.'	き 聞く 'to hear.'
き 切るる 'to be discontinuous.'	き 切る 'to cut.'
わ 分かるる 'to be intelligible.'	わ 分かる 'to understand.'
	第三活用
み 見ゆる 'to be visible.'	み 見る 'to see.'

自動詞		他動詞	
第一活用		第一活用	
つな 接がる	'to be continuous.'	つな 接ぐ	'to join.'
第二活用		第一活用	
お 降るる	'to descend.'	お 降ろす	'to let down.'
お 起くる	'to rise.'	お 起こす	'to raise.'
い 出づる	'to go out.'	い 出だす	'to put out.'
第一活用		第二活用	
たす 助かる	'to have help.'	たす 助くる	'to help.'
さだ 定まる	'to be fixed.'	さだ 定むる	'to fix.'
か 変わる	'to change.'	か 変ゆる	'to change.'

次に列挙するような例は、同一の語根を含んだ、対となる他動詞を持つ。二列目の例は、一見すると一列目の使役形式であるように思われるかもしれない。これらは実際、自動詞形式に対応する他動詞形式であるが、その自動詞形式はほとんどの場合、消滅してしまったか、もしかすると元々存在しなかったものかもしれない。例えば「貸^かす」は 'to cause to borrow (借りることを引き起こす)' の意味ではなく、'to cause to be borrowed (借りられることを引き起こす)' である。「見^みする」は自動詞「見^みゆる」'to be visible' に対応する他動詞形式であり、'to cause to see (見ることを引き起こす)' という意味ではない。それは「見^みさする」になってしまう。これらの形式が決して敬語の意味にならないという事実は、これらが使役動詞とは見なされないことを示している。

か
借る 'to borrow.'
さづ
授かる 'to receive.'
あづ
預かる 'to take charge of.'
さとる 'to understand.'
たまわ
賜る 'to receive.'
きる
着る 'to wear.'
みる
見る 'to see.'

か
貸す 'to lend.'
さづ
授くる 'to give.'
あづ
預くる 'to give in charge.'
さとす 'to acquaint.'
たま
給う 'to give.'
きる
着する 'to put on (clothes).'
みる
見する 'to show.'

2. 使役動詞 (Causative Verbs)。

動詞の使役形式は、以下の経験則に従って作られる。

規則：第一活用動詞と不規則動詞「有る」と「往ぬる」は、「すす」(語根「せ」)を否定語基に加える。

第二、第三活用と不規則動詞「来る」は、否定語基に「さする」(語根「させ」)を加える。

[41]

例

第一活用

まも 守る 'to guard.'	まも 守らせる 'to cause to guard.'
ころ 殺す 'to kill.'	ころ 殺さする 'to cause to kill.'

第二活用

や 瘦する 'to become lean.'	や 瘦せさする 'to cause to become lean.'
たづぬる 'to look for.'	たづねさする 'to cause to look for.'

第三活用

みる 見る 'to see.'	みる 見さする 'to cause to see.'
--------------------	-------------------------------

「する」 'to do' の使役形式「さする」は不規則に形作られる。「しむる」を語根に加えることによって作られる使役動詞は、第一活用の場合、末尾の「i」を「a」か「o」に変えるのだが、後世の書き言葉の形

式では一般的である。

全ての使役動詞は、「e」で終わる語根を持ち、第二活用である。

使役形式は敬語の意味を持つ独自の動詞⁴⁰のかわりに、非常によく用いられる。その理由は、日本の考え方によれば、命令を遂行“させる”⁴¹臣下や従者に囲まれるような階層の人間として表現することが礼儀正しい、と考えられているためである。「す」で終わる他動詞は第一活用であり、敬語の意味で用いられることはあり得ない。

3. 受動動詞 (Passive Verbs)。

受身形式の動詞は、以下の経験則に従って作られる。

規則：第一活用と不規則動詞「有^ある」「いぬ^いる」は「るる」(語根「れ」)を否定語基に加える。

第二、第三活用と不規則動詞「来^くる」「する」は「らるる」(語根「られ」)を否定語基に加える。

例

能動	受動
貸 ^か す 'to lend.'	貸 ^か さるる 'to be lent.'
食 ^た ぶる 'to eat.'	食 ^た べらるる 'to be eaten.'
見 ^み る 'to see.'	見 ^み らるる 'to be seen.'
有 ^あ る 'to be.'	有 ^あ らるる 'to be able to be.'
来 ^く る 'to come.'	来 ^く らるる 'to be able to come.'
する 'to do.'	せらるる 'to be done.'
往 ^い ぬる 'to depart.'	往 ^い なるる 'to be able to depart.'

[42]

全ての受動動詞は、「e」で終わる語根を持ち、第二活用である。

⁴⁰ 敬語専用の本動詞「おはす」「のたまふ」などを想定していると考えられる。

⁴¹ 原文「causes」が斜体。これは強調のためと解釈し、訳文の該当部分に“ ”を用いた。

自動詞の場合、これらの形式は上述した「^ま来らるる」「^い往なるる」の例のように、可能の意味を持ち、そして他動詞の受動形式は、受動の意味だけでなく可能の意味も持ちうる。例えば、「^み見らるる」は‘to be seen (見られる)’か、‘to be able to seen (見ることができる)’となる。可能はたびたび敬語の意味に合流し、‘has been able to do something (何かを成し終えることができた)’と言う方が、単純に‘he has done something (彼は何かを成し終えた)’と言うよりも、より丁寧だと認識されるようになる。使役動詞の受動形式は、非常に頻繁に独自の動詞の敬語の代わりに用いられる。よくある例としては、「^あ有る」の使役の受動「^あ有らせらるる」であり、この形式は天皇について話す時によく使われる。*

* 『^{ことばのちかみち}詞捷徑』巻一は、自動詞と他動詞、使役動詞と受動動詞の主題に関する、国学の第一の権威である。

他動詞と自動詞、使役動詞と受動動詞の例

子^{おんな}を女^{あづ}に預けて
 養^{やしな}わす。
 火^ひの中^{なか}にうちくべて
 焼^やかせ給^{たま}うに、めら
 めらと焼^やけぬ。
 火^ひにくべて、焼^やきたり。
 さし越^えされし (honorific
 use of passive) 絵^え図^づ面^{めん}。
 天^{てん}地^ちの間^{あいだ}に生^うま
 るるもの。
 皇^{くわう}都^とかわらせ給^{たま}う
 ことなし。
 民^{たみ}やすかれと朝^{あさ}
 夕^{ゆふ}な祈^{いの}らせ給^{たま}うこと。

Having given the child in charge to a woman, he caused her to nourish it.

When he caused (his attendants) to burn it by throwing it into the middle of a fire, it burned away with a blaze.

He burnt it by placing it on the fire.

The map which you have been good enough to send me.

Creatures born between heaven and earth.

The imperial line of descent has never changed.

(The Emperor's) praying every morning and every evening that his subjects may have ease.

4. かなりの数の動詞は、終止形の末尾「u」を「aru」、「au」⁴²、「su」に変えることで形作られる。これらは、単なる代替可能な形式のように思われる。そしてこれらの意味は元の動詞の意味と等しい。

[43]

III. 形容詞から派生したもの (Derived from Adjectives.)

1. 語根に「む」を加えることによって。

例：「白き」 'white' の語根「白」から「白む」 'to become white'。
 「黒き」 'black' の語根「黒」から「黒む」 'to become black'。

2. 語根に「する」を加えることによって。「n」が間に入ると「する」の先頭のsは音調を整えるため「にごり」を帯びる。

例：「重き」 'weighty' の語根「おも」から「重んずる」 'to respect'。
 「甘き」 'sweet' の語根「あま」から「甘んずる」 'to relish'。
 「軽き」 'light' の語根「かろ」から「軽んずる」 'to contemn'。

これらの動詞は時々「おもんじる」「あまんじる」などと誤って綴られる。

3. 語根に「る」を加えることによって。

例：「^{しげ}繁き」 'dense' の語根「^{しげ}しげ」から「^{しげ}繁る」 'to be dense'。
 「^{にが}苦き」 'bitter' の語根「^{にが}にが」から「^{にが}苦る」 'to feel bitterly'。

4. 「たき」で終わる願望を表す形容詞や、その他の幾つかの形容詞から、語根に「がる」を加えて動詞が形作られる。

例：「^ゆ行きたき」 'desirous of going' から「^ゆ行きたがる」 'to wish to go'。

「^ほ欲しき」 'eager' から「^ほ欲しがる」 'to be eager'。

「^{あや}怪しき」 'strange' から「^{あや}怪しがる」 'to feel suspicious'。

⁴² 四段活用の未然形に後接する接尾辞「ふ」か。

動詞「有^ある」を伴う形容詞の副詞形式に頻繁に出くわすが、これら派生動詞はそうした複合したものととは区別されなければならない。従って、「欲^ほしが^はる」は「hoshik'aru (欲^ほしく、有^ある)」とは異なるのである。

複合動詞 (COMPOUND VERBS.)

複合動詞の第一要素は、名詞、または形容詞語根でありうるが、それよりも一般的なのは、語根形式の動詞である。複合動詞の第一要素はもうひとつの要素に対して、以下のような関係にある。

第1. 直接目的語、または間接目的語との関係

例：思^{おも}い-捨^すてる 'to cease thinking of'。
天^{あま}-下^{くだ}る 'to descend from heaven'。

第2. 修飾する副詞との関係

例：煮^に-殺^{ころ}す 'to boil to death'。
攻^せめ-入^{はい}る 'to enter with violence'。
ぶち-殺^{ころ}す 'to beat to death'。

第3. しばしば等位になる

例：行^ゆき-帰^{かえ}る 'to go and return'。
逃^にげ-散^ちる 'to flee and scatter'、'to be put to the rout'。

[44]

派生形容詞 (DERIVATIVE ADJECTIVES.)

《「らしき」》

語尾「らしき」を加えることによって名詞から派生した形容詞は、英語の ish を持つ形容詞と類似した意味を持つ。この語尾は後世の日本語の形式に属する。

例：「子供」^{こども} ‘a child’ から「子供-らしき」^{こども} ‘childish’。

「女」^{おんな} ‘a woman’ から「女らしき」^{おんな} ‘womanish’。

《「しき」》

多くの形容詞は活用しない語に「しき」を加えることによって形作られる。

例：「甚だ」^{はなは} ‘very’ から「甚だしき」^{はなは} ‘extreme’、‘sebere’。

「ひと」 ‘one’ から「ひとしき」 ‘uniform’、‘similar’。

類似の形容詞は、語根の末尾の母音が通常どおり変化する場合において、動詞語根からも形成される。

例：「好む」^{この} ‘to like’ から「好ましき」^{この} ‘loveable’。

「急ぐ」^{いそ} ‘to hurry’ から「忙がしき」^{いそ} ‘busy’。

「恐るる」^{おそ} ‘to fear’ から「恐ろしき」^{おそ} ‘dreadful’。

「思う」^{おも} ‘to think’ から「思しき」^{おも} ‘appearing like’。

《「けき」、「けく」》

この語尾は、日本語の古い書き言葉の形式や詩歌に特有のものである。この形容詞は、語根に「けく」を加えることによって他の形容詞から形作られるが、意味において元の語と相違は無いように思われる。従って、「ながけく」^{なが}「さむけく」^{さむ}は、単に ‘long’、‘cold’ を意味する。現在も副詞形式だけが使われている。「けき」は「たいら」「あきら」のような活用しない語から形容詞を作るために、古語で用いられる。例えば「たいらけき」「あきらけき」は、当代の表現「たいらかなる」「あきらかなる」と同義である。

すべての動詞は、語根に「たき」、終止形に「べき」「まじき」を加えることによって作られる、派生的な形容詞をもつ。だがそれらの語尾は「てにをは」の中にもめるのが、より便宜的である。

複合形容詞 (COMPOUND ADJECTIVES.)

複合形容詞の第一要素は、名詞、語根形式の動詞、またはもう一方の形容詞の語根、そのどれかである。

複合形容詞の例

「名」^な 'name' と 「高き」^{たか} 'high' から 「名-高き」^{な たか} 'famous'。

「手」^て 'hand' と 「早き」^{はや} 'quick' から 「手-早き」^{て はや}。'dexterous'。

「聞く」^き 'to hear' と 「苦しき」^{くる} 'painful' から 「聞き-苦しき」^{き くる} 'harsh'。

「逃るる」^{のが} 'to escape' と 「難き」^{かた} 'difficult' から 「逃れ-難き」^{のが かた} 'inevitable'。

「する」^{やす} 'to do' と 「易き」^{やす} 'easy' から 「し-易き」^{やす} 'easy to do'。

「薄き」^{うす} 'thin' と 「赤き」^{あか} 'red' から 「薄-赤き」^{うす あか} 'light red'。

【参考文献】

古田東朔 (1978) 「アストンの日本文法研究」『国語と国文学』第 55 卷
第 8 号 (鈴木泰ほか編 (2010) 『古田東朔近現代日本語生成史コレクション第 3 卷』くろしお出版に再録)

遠藤佳那子 (2022) 「W.G. アストン『日本文語文典』初版 訳注稿 (2)」
『鶴見大学紀要』(日本語・日本文学編 59 号)